

全過大量処分に抗し

一大実力闘争で粉碎せよ

反動化する資本の攻撃に 屈服した七九春闘

マルクス・レーニン主義通信

月刊 1部100円

共産主義者同盟(全国委)
マルクス・レーニン主義派
編集発行人 目黒安雄
横浜港南郵便局私書箱16号
振替 横浜3719

資本とその手代による

「管理相場」の貫徹

七九春闘の第一の特徴は、資本、ブルジョア組合主義による賃金抑制(賃金自肅)攻撃が貫徹されたことである。

同盟は、「企業の業績が好転しており、要求達成の条件が整ってきた」として「要求基準(六・五%)、約一万二千円)の完全達成をめざす」ことを確認した。だが「企業業績の好転」にもかかわらず、昨年の要求額の三分の二という切り詰められた要求は、労働者に低賃金を強制する一方で、「企業に雇用拡大、定年延長、時間短縮を実施し、あるいは社会保障費等の負担増大に応ずる余地」をあたえるという反動的な要求基準であった。

金属労協(IMF・JC)は、四月五日「これ以下では妥結しない」基準として「九千円以上を確保する」ことで同意した。七五年以来、『集中決戦』で賃上げに『相乗効果』をもたらし春闘を主導してきたなどと言ってきたJCは、昨春闘で「鉄の一発回答」が賃上げ水準の沈静化、低賃金相場を形成したことによって、労働者の不満と反発を高め、そして、『集中決戦』の破産によって、統一指導体制を崩壊させ、「相場なき春闘」を生みだしたのである。

ブルジョア組合主義者は、今春闘で「不況業種の水準を引き上げる」と主張してきた。だが、バラバラ要求を「妥結基準の一本化」へと修正したものの、造船重機が脱落し、史上空前の企業収益を上げた電機では昨年並み、輸出にかけりが見えた自動車は昨年以下に抑えこまれるなど、独占資本の賃金抑制に追随したのである。そして造船重機の脱落にもかかわらず、彼らは造船資本に対する抗議一つおこなわなかつたし、逆に、「減量経営」に協力し首切り攻撃の尖兵となつてるのである。

いまやJCは、「集中決戦」の破産、統一闘争の解体=統一指導(管理)体制の崩壊へと突き進んでいる。資本の安定を謳い、企業業績の回復が労働者の生活の向上をもたらし、それ故労働者は賃上げを自肅しなければならないといふこの反動的ペテンに対し、イギリス、西独などでは労働者の末曾有の反撃が開始されているように、今春闘でもブルジョア組合主義者に対する不満、反発が着実に増大している。こうしてブルジョア組合主義者は、資本の手代として、労働者に低賃金を強制し、資本の攻撃に対する労

働者の反撃を組織するのではなく、その解体へと導いていることをますます明らかとしてきたのである。

破産し、腐敗する

公労協労働運動

七九春闘の第二の特徴は、公労協労働運動の破産、解体が進んだことである。

七九春闘の帰趨を決する二五日以降の公労協・交運統一スト(全電通は脱落)は、総評組合主義者の政府、資本への屈服、闘争放棄によつて半日程度で收拾された。公労協は、公労委調停の加重平均九六四一円、賃上げ率五・六三%が提案されるやすぐに中止指令を打ち出した。この電電を除く二公社五現業への仲裁裁定は、昨年より額、率ともにいくらか上回つたものの決して同盟、JCの相場を突破するものではなかった。

日経連の調査(一九日段階)においても、九五八五円、五・六%(主要二七業種、大手三二六社を対象、一七四社の回答)がそれまでの春闘相場であった。まさに、資本、ブルジョア組合主義者による「管理相場」(朝日新聞)のなかでの妥結に他ならなかつた。

宮田(金属労協議長)は、「公労協の賃上げ額・率自体については民間からみれば、予想外に高かつた。・・・公社現業はこの機会にできれば、民間なら生産性向上できびしく対応する赤字問題について、少しでも少なくしていくための対応を労使で考えていくべきだと思う」と語り、最後にJCの回答が「ことしの賃上げにいい影響を与えた」と結論づけている。これは資本家の発言でなく、労働者の『代表』の発言なのだ。

このような発言ができるのも、すべて総評組合主義者が、JC依存や、労働者の実力闘争を放棄してきた

本号の内容

統一地方選の結果

中東和平条約の反動性

一七一年一一・一九裁判

検察側控訴する

進む「毛沢東思想」からの脱却(下)

// 4 頁

一第二次ブント総括

どのようにして「第三期」を清算すべ

// 8 頁

マルクス・レーニン主義通信

ことに帰因している。そして賃上げ額・率ばかりか、国鉄再建を中心とする政府・当局の合理化計画への公労協の協力、労資協調主義の高まりも、ブルジョア組合主義者への接近としてあらわれている。

富塚総評事務局長は、賃上げ相場の運動パターン（「鉄鋼・電力・私鉄・公労協」）を「打ち破った」ことが、「今春闘戦略の大きな成果」であったと語った。

この運動パターンが転換したことが果して労働者に利益をもたらしたであろうか？ 否である。総評組合主義者は、先の仲裁裁定案をもってスト收拾へ動いたのであり、そしてその額、率が私鉄へ連動したことのなかに、どれだけの価値があつたのだろうか。栗原労相は、「国鉄の労使が国鉄再建のために一生懸命やろうという気持をもって、その糸口でも一歩でも進むなら政府として好ましいことではないか」ということで早期に有額回答を出した」と語っている。

このように政府は、公労協のストなし春闘、早期決着路線、そして国鉄再建に対する国労、労動労の協力（「サービス向上運動」「貨物安定宣言」）と引きかえに「早期に有額回答」を出したのであり、それはまた、国鉄運賃値上げ（五月に予定されていた）の前に決着つける必要が最優先していたのである。これが富塚のいう「成果」の本質であり、なによりも労働者の実力闘争を放棄したことへの代償であり、政府の「譲歩」（春闘相場のなかでの）に他ならない。

総評組合主義者はまたも口先だけの実力闘争に終始した。彼らは労働者の実力闘争に依拠して、政府、資本の種々の攻撃を打ち破るのではなく、かぎりなく協調主義を強め、ブルジョア組合主義に接近していることを示した。

公労協統一闘争の崩壊と全電通

そして第三の特徴は、公労協統一闘争の崩壊である。全電通組合主義による個別闘争、産別重視の強調による統一闘争からの逃亡は、昨年の総評大会において開始されていた。全電通は、大会へ「春闘見直し」論を提起し総評内「左派」の批判を浴びた。この「春闘見直し」論は、春闘四連敗を契機に活発化した春闘の再構築論議のなかで登場したものであり、「八〇年代労働運動」への移行を謳つた路線と称されているのだ。

だが、この「春闘見直し」論は、総評組合主義の行きづまりのなかで、一方の国労に代表される公労協統一闘争を堅持する部分が思案的にも実践的にもブルジョア組合主義へ接近しているのに対し、ブルジョア組合主義への移行を積極的に体系化しているのである。

二十三年に一度の賃金闘争、公労協統一闘争による一括調停方式から産別統一闘争への移行、などを主要な内容とする「春闘見直し」論は、賃金闘争を消費者物価の安定をめざし物価スライド制を条件にしていることなど見れば、宮田の「物価マキシマム」（賃上げの目標を最大でも消費者物価上昇分を確保するところにおく）に自主交渉をつけ加えた程度の相違しかない。

これは、あきらかに同盟の「社会契約型」の労働運動への接近であり、労働者の実力闘争から自主交渉＝ボス交渉重視への転換宣言でもある。このことは公労協統一闘争から離脱し、二四日にはストライキ中止を打ち出し、個別交渉に乗り出したことによって明白である。

全電通組合主義者は、産別重視から来年には「電通労連」改名もありうると断言し、その上労働戦線統一の「官民の橋渡し」となることも明らかにしている。このような全電通の産別重視、自主交渉路線の強化に対し、公労指導部や富塚は何の批判もできず、肯定的評価さえ与えているのだ。

だが、全電通の統一闘争からの逃亡に対する現状の統一闘争固持の立場からする批判は、決して有意義なものではない。公労協統一闘争もまたブルジョア改良主義の限界を露呈しているのであり、労働者階級の利益を貫徹した労働者の真の団結こそが問われているからである。

資本の安定か、資本の打倒か

同盟・JCのブルジョア組合主義は、進展する資本の「減量経営」に加担し、労働者の生活を一層危機におとしこんでいる。資本は「減量経営」を通して企業回復を計り、それは労働生産性の大幅な伸びとなつてあらわれている。

完全失業者が百万人を持続し（政府発表の三月分では前月より一四万人増の一三五万）、有効求人倍率はいまだに〇・六前後であり、中高年令層にとって再雇用は一段と厳しくなっている。今春闘の重要な課題であった雇用闘争も、そしてその他の制度・政策闘争もまた徹底して闘わることはなかつた。

賃上げ闘争を補完すると位置づけられるこれらの改良闘争は、企業再建の前に、そ

今春闘のなかでは、国鉄、全通労働者に対する大量処分攻撃がかけられたのである。この処分に対し、処分撤回の闘争を組織することができるない総評組合主義者に、労働者の生活防衛の闘争が組織できないことは明々白々である。

このような政府、資本の拠点破壊を自論むもある。このことは公労協統一闘争から離脱し、二四日にはストライキ中止を打ち出し、個別交渉に乗り出したことによって明白である。「オルグ」を口実とした暴力的な千葉労働破壊策動は、革マル派に牛耳られた労働本部の反動性を示してあまりあるものである。

これは、貨物安定宣言などに顕著なよう、攘夷労つぶしの反階級的行動に打って出た。「オルグ」を口実とした暴力的な千葉労働破壊策動は、革マル派に牛耳られた労働本部の反動性を示してあまりあるものである。

他方、この政府、資本の攻撃と時期を同じくして、一貫して三里塚空港反対闘争を闘い抜いてきた千葉労働に対し、労働本部は千葉労働つぶしの反階級的行動に打って出た。

民衆に追随してきた労働革マルが、戦闘的労働者の政治闘争への参加に対し公然と敵対してきたことを意味するのであり、資本家どもの尖兵となつたことを暴露したものであつた。先進的労働者は、このような経済主義、日和見主義の反動的転換と闘い、全人民的政治闘争を貫徹し、経済闘争との一大結合をかちとつていかなければならぬ。

不況下の春闘は、同盟、JCの階級的役割を鮮明にしたばかりか、総評組合主義の破産、腐敗をおし進めた。

同盟・JCのブルジョア組合主義は、進展する資本の「減量経営」に加担し、労働者の生活を一層危機におとしこんでいる。資本は「減量経営」を通して企業回復を計り、それは労働生産性の大幅な伸びとなつてあらわれている。

労働者に対する攻撃は、社会排外主義をこにして、労基法の改悪、自主管理闘争を法的に排除する民事執行法、労働争議に対する反動的判決、更には元号法制化、「成田治安立法」適用策動、そして東京サミットを理由とした「過激派狩り」、等々とあらゆる領域で強まっている。

いまや、資本の支配に追随する日和見主義との闘争がこれまでになくなつてきているのである。労働運動と社会主義の結合をかちとり、資本の支配を打倒する闘いに決起しなければならない。この闘いの前進のなかでこそ、労働者の未来は切り拓くことができるのである。

〔後記〕毛沢東主義が国際共産主義運動においてはだした役割 中ソ論争の評価などについて

別の機会に譲りたい。

諸々の合理化など一層強まっており、更に、

政府、資本の攻撃は、賃金抑制、首切り、

決定的に無力であった。企業防衛、資本の安定を求めるブルジョア組合主義者、総評組合主義者がこれらの闘争を闘い抜く決意も内容も持ちあわせていないことは明らかである。

おいてはだした役割 中ソ論争の評価などについて

別の機会に譲りたい。

マルクス・レーニン主義通信

第九回統一地方選挙は、昨年の京都、沖縄知事選にひき続き、社共＝「革新」の大敗北、「保守・中道」連合の圧勝に終った。投票率は、四月八日、二二日の都道府県知事選、道府県議選、市長・市議選と統一選史上最低を記録した。「争点なき」選挙、「シラケ」選挙は、「五五年体制」の崩壊、既成政党の腐敗、頽廃への不信がこれまで以上に高まっていることを証明したのである。

「保守・中道」連合の「到来」運営についても同様)。

故の戦略に他ならなかつた(国会

自民党は、「選挙は勝たねばな

今回の統一地方選挙の第一の特徴は、「保守・中道」連合が全国的に広がつたことである。

前回と比して、自民主導型市長は九〇から六〇に減少し、自民党単独の地方政府は明らかに後退している。だが、この自民党の後退を補完したのが、公明、民社、自由クとの連合であった。

特に顕著となつた公民両党の自民党への接近は、「中道」勢力が危機に瀕する自民党政治のたて直しに奔走していることを明らかにした。

公明党は、統一地方選に臨むにあたり、「旧来の硬直した『保守』『革新』論を乗り越え」と「新しい革新論」を謳い、民社党は、「この危機(財政危機)」はイデオロギー対決や形だけのスローガンでは、決して打開し得ない」と、「責任野党論」を打ち出した。これららの「現実主義」は、労働者をペテンにかけ自民党との協調、追隨を正当化することに他ならない。

公民両党は、先の国会での七九年度予算案審議では「保革」連合を組み、また元号法制化、グラマン・ダグラス疑惑では自民党を支援するなど、明らかに自民党政治、支配の危機を救援してきたのである。

いうまでもなく、こうした「中道」勢力の保守化、「保革」連合なるものは、ブルジョア独裁の一種にすぎず、「第三の道」などありえないことはこれまで述べてきたことである。そして、このような「保守・中道」連合の推進こそ大平政権の登場の意義を明らかにしている。

「タカ派」福田にかわる大平は、「部分連合」を謳い、自民党政治の安定を「中道」勢力の保守化に求めた。だがこのことは、自民党は、自民党支持率の傾向的低落、特に都市部における四分の一政党

社共＝「革新」の敗北

「革新」自治体の東京、大阪に

おける敗北は、社共のブルジョア改良政治の破産を示している。

社共は、「革新」自治体を自民

党反動政治に対する民主主義の

堵などと主張し、「革新」

自治体のなかでこそ労働者

であるかの幻想をふりまい

てきた。

だが、資本主義の危機は、

地方財政の危機をもたらし、

「革新」自治体もまた自治

体労働者数の削減、福祉の

切り捨て、公共料金の値上

げと労働者への犠牲を集め

した。「革新」自治体が、

中央政治ブルジョア政治

の一翼を担うことは避けら

れず、こうして「自治体社

会主義」の反動的ペテンは

破産せざるをえなかつた。

東京における太田の敗北

に対して共産党は、その原

因を、社会党、美濃部の責

任にしている。

そこでは、社会党の動搖、

大阪での自民、「中道」との連合が敗因の第一に上げられている。確かに社会党は、黒田不支持から自民、「中道」と連合し、あまりさえ岸を労働者の利益を守る候補だとして労働者を欺瞞した。大阪府連は社会党内右派を代表し、改良主義、内右派を發展させられ

た。

だが、共産党の批判は、「革新」

自治体の防衛以外、何等「保守・

中道」と差がなかつたし、これこ

そ「革新」の実態に他ならなかつた。

崩壊した“革新”自治体

統一地方選

た。

岸のスローガンが、「大阪経済の復権」、活力を求める——であつたのに対し、黒田もまた、「大阪産業・経済の再建・発展をめざす」を第一に上げていた。資本の救済策で争うことがはたして保守、

「革新」の対立を明らかにするだろうか? 資本の救済に関して、

自民、大阪財界、そして「中道」、

社会党を引きつけた岸に勝てるであろうか、答は明らかである。資本の利益を代表するのは自民党の

本分であり、共産党は腐敗しているのである。

また、美濃部に対する批判は、天につはすることに他ならない。

美濃部は、都知事を去るにあたり、「せいせいした」と語り、書斎に

帰ることを宣言した。このようないいせいした」と語り、書斎に

小ブルインテリゲンチャを「革新」の顔と三期一二年間も支持してきていたのは社共であった。美濃部都政

は決して労働者の利益にはならなかったし、財政赤字再建のための起債許可条件として政府から打ち出された労働者に対する攻撃をそ

のまま遂行した。こうした美濃部

が、中立を表明したことが都知事の顔と三期一二年間も支持してきていたのは社共であった。美濃部都政

マルクス・レーニン主義通信

アラブ解放闘争に敵対する中東和平条約

三月二六日、エジプト・イスラエル平和条約がワシントンで調印された。

カーター米大統領は、「この条約は平和への第一歩、長い、困難な行程への第一歩である」と語った。カーターの目指す「平和」とは、シオニズム・イスラエルの承認を前提としている以上、パレスチナ・アラブ労働者人民の反抗は不可避である。

アラブ諸国は、エジプト・イスラエル平和条約調印後、バグダッドでアラブ外相・経済相会議を開きエジプト制裁に合意した。また、エジプト・イスラエルの単独和平交渉の展開以降、中東和平交渉から除外されていたソ連社会帝国主義は、「中東の事態に傍観的無関心を装うことはできない」と表明し、シリア、PLO(パレスチナ解放機構)と同条約を全面的に拒否することを確認した。ソ連社帝は、シリア、イラクを足し出た。

我が同盟は、大阪地検の控訴を断じて許すことができないし、あまつさブルジョア支配の番人である裁判所が、七一年一一・一九鬭争を「裁く」ということ 자체、我々は許すことができないし、あまつさ大阪地裁判決を量刑不当で控訴する大阪地検の蛮行のなかに国家権力の意図をはつきり見定めておかねばならない。

司法の反動化が叫ばれて久しい。今日ブルジョア裁判所は、労働争権に対して反動的判決を下し、あるいは無実の部落青年石川一雄氏を「犯人」にでっち上げ、「上告」を「犯人」にでっち上げ、「上告」をされた。

がかりに中東への霸権を強め、米帝との争奪戦を激化させている。

ソ連社帝は米帝主導の中東和平に反対しているのである。

他方、米帝国主義はイラン革命によって高まつたアラブ反動派の米帝不信、そして中東における軍事的戦略地域の喪失(イランに続

TOーから離脱し、同条約は実質的に崩壊)のなかで、是が非でもエジプト・イスラエルの「和平」を成行させねばならなかつた。ま

た、カーターは同条約の調停の成功こそ次期大統領選の当落を左右する全ゆる精力をつぎこんでいた。こうしてカーターは、エジプト、イスラエルへの大量の軍事、經濟援助を武器に、調停を成功させたのである。

この条約においては、当事者でエジプト、イスラエルは、それ

が日本軍事同盟の強化をもたらし、活動を強めている。このように労働者人民に対して反動的なブルジョ

ア裁判所、検察庁が、ブルジョア裁判所、検察庁が、ブルジョア犯罪、企業犯罪のロッキード、グ

ラマン凝獄に対してどのような態度をとっているか、このことを見ればその階級的役割は明らかである。

ペギンは、三月二〇日、次のように語った。

71・11・19
沖縄裁判

大阪地検の控訴弾劾

①イスラエルは六七年戦争前の

境界線へ決して復帰しない

スラエルはヨルダン川の西岸にパレスチナ国家が建設されることを決して認めないし、阻止するであろう

②統合された、一つのエル

サレムは永久にイスラエルの首都である、とその侵略、占領地を保持する反動的姿勢を明らかにした。

ソ連社帝の中東和平は決してこ

のシオニズム・イスラエルの立場

通り沖縄闘争への弾圧である。こ

のような弾圧は我が同盟のみならず、中核派への死刑攻撃としても目指すアラブ労働者人民の階級闘争は、かならずやエジプト・イスラエルによる反動的な単独和平を粉砕するであろう。

の援助は、イスラエルへ四〇億ドルの軍事援助、經濟再建へ年間二

〇億ドル以上、そしてエジプトへは、サダトの「社会・經濟・政治安定のための構想」という五年間

に約一五〇億ドルのプランに対し総額五〇億ドルの援助(日本もこ

の一部を分担することが日米首脳会談の重要な課題となっていた)

等々を約束した。

こうして調印された同条約は、昨年九月のキャンプデービット合

意を踏襲したものであり、①イスラエル軍のシナイ半島からの段階功こそ次期大統領選の当落を左右する全ゆる精力をつぎこんでいた。こうしてカーターは、エジプト、イスラエルへの大量の軍事、經濟援助を武器に、調停を成功させたのである。

この条約においては、当事者で

サダト・エジプトはアラブ世界で

文字通り孤立化したのである。

イスラエル占領地では、調停後

パレスチナ人民の不満が高まり、抗議の全面休校、デモ、ストが

スラエル軍の弾圧下で組織されて

いる。

他方、イスラエル軍は、パレスチナ難民キャンプへの攻撃を強め、

あるパレスチナ人、そしてその唯一の代表機関であるPLOを無視

していること、また、シオニズム・イスラエルへの大量の武器、軍事

エルの侵略主義、拡張主義はますます高まっている。

ペギンは、三月二〇日、次のように語った。

①イスラエルは六七年戦争前の

境界線へ決して復帰しない

スラエルはヨルダン川の西岸にパレスチナ国家が建設されることを

決して認めないし、阻止するであ

る

②統合された、一つのエル

サレムは永久にイスラエルの首都である、とその侵略、占領地を保持する反動的姿勢を明らかにした。

ソ連社帝の中東和平は決してこ

のシオニズム・イスラエルの立場

通り沖縄闘争への弾圧である。こ

のような弾圧は我が同盟のみならず、中核派への死刑攻撃としても目指すアラブ労働者人民の階級闘争は、かならずやエジプト・イスラエルによる反動的な単独和平を粉砕するであろう。

マルクス・レーニン主義通信

「近代化」に邁進する中国 進む「毛沢東思想」からの脱却(下)

中国革命と毛沢東主義

毛沢東の登場まで

まず、毛沢東主義の「出生の秘密」を明らかにしよう。

中国共産党は、コミニンテルンの指導の下で、一九二一年に結成された。当時の中国は、一九一一年の辛亥革命によって清朝は打倒されたが、半植民地的状態であり、農村人口がほとんどを占めていた。このような条件に対し、コミニンテルンは、一九二三年、「中国における唯一の真剣な民族革命的グループは、一部は自由主義的・民主主義的なブルジョアジーと小ブルジョアジー、一部はインテリゲンチャと労働者に基礎をおく国民党である」と決議し、その下で中国共産党は同年の第三回大会において、「中国国民党は民族革命の中心勢力である」と宣言して、労働者、農民、民族ブルジョアジー、インテリゲンチャからなる「四民ブロック」＝統一戦線戦術を採用したのであった。

このような思想は、「ブルジョア革命のへと主張したかつてのメンシェビキと同様の日本和見主義である。そしてその日和見主義は、国民党への加入戦術によって、一層拡大されたのである。これは、「おくれた国のブルジョア民主主義的な解放潮流を共産主義色に見せかけることは、断固としてたたかわなければならぬ。……共産主義インタナショナルは植民地およびおくれた国のブルジョア民主主義派と一時的な同盟をむすばなければならぬが、それと合同すべきではなく、プロレタリア運動の自主性を、運動がたとえとも萌芽的な形をとつていようとも無条件に保持しなければならない」（『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案』）というレーニンの主張とは対照に、プロレタリアートを民族ブルジョアジーに追従させるものに他ならない。

案の上、第一次国共合作は、無残な結果をもたらした。一九二五年以降、上海などの都市労働者は日本資本の工場でストライキにいたちあがり、五・三〇事件（ストライキ参加者が射殺された事件）、沙面事件（広東市でデ

モ隊にイギリス船が発砲した事件）などを契機にゼネストが広がった。又、農民の闘いも地代全廃の要求へと発展していったのであった。

このような時に、中国共産党はどうな活動をしていたか？ 彼らは、レーニンのように、労働者と農民の革命的民主主義的独裁に向けた宣伝、煽動、組織の活動を遂行しながら、のみならず、「四民ブロック」＝統一戦線を維持するために、労働者、農民の闘いにブレークをかけたのであった。そして、それが大敗北を準備したのである。

労働者、農民の運動が新しい共和国建設をもたらすとしてきたブルジョアジーも、その革命的発展に不安を感じてきた。スターリンに「革命家」とたたえられてきた蒋介石は、共産党や労働者に対する弾圧を開始し、国民党内の共産党員の地位を制限した。にもかかわらずコミニンテルン・スターリンは、「蔣介石が広州でクーデターをおこしたというのはデマである」とか「蔣介石は規律に服している。国民党はブロックである。右翼、左翼、共産党をもつての革命的議会である。それなのになぜクーデターがおこるというのか」と言って、労働者に眞実をおおいにくしていたのである。そのような中で蒋介石はクーデターの準備を進め、二七年四月十二日に決行し、労働者は処刑され、上海の共産党组织はほぼ全滅したのであった。

だが、それにとどまらなかつた。コミニンテルン・スターリン、中国共産党は、同じ戦術を護持し、国民党左派の武漢政府に追随して、スター・リンは、「武漢の国民党が軍閥と帝国主義にたいして断固たる闘争をおこない、実際にプロレタリアートと農民の民主主義的独裁の機關となる」（スター・リン全集九巻）と語つたのである。それはダメージを一層大きくただけであった。共産党的コピにもかかわらず、武漢政府は蔣介石との妥協に転じ、共産党員と労働者の虐殺を始め、じきに蔣介石の南京政府と合流してしまつた。

その後コミニンテルンは、かの悪名高き「第三期」論に基づき、李立三路線といわれる極左的・撲滅主義へと転換した。南昌蜂起、秋收蜂起、広州蜂起等は、反革命的な大虐殺を結

果した。「四民ブロック」戦術のゆりもどしとしてのこの極左路線は、労働者階級の闘いの解体の最後の仕上げの役割をはたしたのである。

中国共産党の労働者党员の比率は、二七年四月の五三・八%から二八年七月の一〇%、そして三一年の二%以下と著しく低下し、都市における労働者の運動の崩壊、共産党组织の壊滅にともなつて、中国共産党は、労働者的政治性格を希薄なものにしていったのである。

このような状況の下で、毛沢東が登場した。ブルジョア革命における農民の役割を強調し、農民闘争を積極的に評価した毛沢東は、コミニンテルンの観念的ドグマに基づく戦術よりもはるかに唯物論的であった。

〔註〕中国革命に対するコミニンテルンの指

導という点において、忘れてはならないものにトロツキーの主張がある。簡単に見解を述べておこう。トロツキーは、「四民ブロック」に対して、「中国共産党は国民党の革命的プチ・ブルジョア派と同盟しているのではなくて、實際には、軍隊と政権を握るブルジョアジーに指導された国民党全体に従属していたのである」（選集六巻）と正當に批判し、又、「国民党的段階をとびこえるな」というスター・リンに反対して労働者と農民の武装、ソビエトを呼びかけた。

だが、トロツキー自身、以前に見たように社民との統一戦線を戦略化して提唱した張本人であり、又、国民党への加入戦術を承認していること、そして何よりも、かの「永続革命論」に基づき、中国の民主主義革命はプロレタリア独裁でしかありえないと主張し、中国の農民は「ロシアの農民よりも一層無力である」と語り、農民闘争の革命性を軽視したこと、特に後者は事実によつて反駁されているように、観念的で誤ったものであった。従つて、トロツキーのスター・リン批判は、抽象的なものにとどまつたのである。

中国革命と毛沢東主義

① 毛沢東の思想、戦術

一九三五年の遵义會議において指導権を確立した毛沢東は、一連の著作を発表し、自ら

の思想、戦術を明らかにした。

中国革命を農民革命と規定し、農村に根拠地を建設して都市を包囲するという毛沢東の戦術は、国民革命リブルジョア革命が土地の変革を重要な構成部分としており、しかも當時の中国においては、農村人口が圧倒的多数を占めているということ、更に、根拠地方式は農村の地方分散的な自給自足的経済単位に依拠してはじめて可能であったこと、などとしてその意義、優位性を確認することができた。

だが、農民戦争を自立化し、絶対化するとすれば、それはマルクス・レーニン主義からの逸脱である。この傾向が見られるところが毛沢東の限界に他ならない。

毛沢東は、次のように言っている、「一九一四年に第一次帝国主義世界大戦がおこり、一九一七年のロシア十月革命で地球の六分の一をしめる土地に社会主義国家がうちたられてから、中国のブルジョア民主主義革命には変化が生じた。」それ以前は、中国のブルジョア民主主義革命は、ふるい世界ブルジョア民主主義革命の範にぞくし、ふるい世界ブルジョア民主主義革命の一一部分であった。

『それ以降は、中国のブルジョア民主主義革命は、新しいブルジョア民主主義革命の範にぞくするものになり、革命の陣営からいえば、世界プロレタリア社会主義革命の一一部分となつた。』なぜか。それは、第一次帝国主義世界大戦と最初に勝利した十月社会主義革命が、世界歴史全体の方向を変え、世界歴史全体の時代を画したからである』(『新民主主義論』)、と。

これは、中国の農民革命の「特殊性」を合理化せんとするものである。そこで毛沢東は、「国際環境」の変化から中国革命の性格を規定しているのである。だが、革命の性格は、社会経済的な体制から規定されるべきものである。「後進国の住民の重要な部分は、ブルジョア的・資本主義的関係の代表者である農民からなっているから、どんな民族運動もブルジョア民主主義運動にしかなりえないといふことは、すこしも疑う余地がない」(レーニン全集三一巻)とレトニンが言うように、農民革命はブルジョア的なものに他ならず、その性格は、共産党が指導したとか、目的意識性を持っているとかいうことによつては基本的に変わるものではない。確かに中国の革命は、ブルジョアジーではなく、労働者と農民によって遂行されたが故に、一層進歩的、革命的ではあったが、そのことから、質的に「新しい」ものと言うことはできないのである。

又、毛沢東は、中国革命の勝利の大きな要因として、「抗日民族統一戦線」をあげている。その際の第一次国共合作の総括は、国民党が「連ソ・容共・労農援助」から反対へ転換したこと、共産党が「幼稚」であったこと

(『矛盾論』)を失敗の原因とするものであ

る。だが、このように、単に両党の指導上の問題にすることは、結果解釈の域をまぬがれないのでなかろうか。そのような総括から正当化された「抗日民族統一戦線」(=第二次国共合作は、結局はコミニテルンの統一戦闘の戦術をこえるものではない。中国革命の勝因は、「抗日民族統一戦線」ではなく、国民党との妥協にもかかわらず戦闘的、革命的に闘った労働者、農民の闘いに求められるべきであろう。

国民党の階級的性格を暴露し、その反動性、動搖性を徹底して批判して孤立させ、日本帝国主義の侵略と封建性を打倒するために労働者、農民の闘いを全ての戦線で組織すること、そして、レーニンが『二つの戦術』で述べたように、「最初の一歩」と「最後の一歩」を区別し、プロレタリアートの独自性を貫徹すること、これこそが正当な戦術であったと言わねばならない。

毛沢東主義は、当時の中国の直面する革命のなかで、最も進歩的な「人民革命」のイデオロギーとして登場したところに絶大な革命性を有する。だが、それを固定化し、絶対化することは、他ならぬ農民の階級的利害を反映することにならざるをえない。富農の一定の限界を述べるだけで、農民の小所有者としての限界にふれず、ブルジョア民主主義革命の前進闘士としてのみ評価することは、そのことを示しており、結局は農民革命の延長上に社会主義を指定する観念性を有さざるをえないものである。

◎ 社会主義建設と毛沢東主義

一九四九年の中国革命の勝利以降、毛沢東は、これまでの小農民経済からの脱却→近代国家への発展に力を注いだ。第一次五ヶ年計画(一九五三・五七年)は、そのことを目的としていたのである。

革命戦争の時期においても農民を重視してきた毛沢東は、経済建設においても、農民の労働を最大限利用し、「自力更生」のスローガンの下に、工業の発展をうながしたのであつた。だが、このような農民に依拠した「自力更生」路線は又、限界をもはらむものであった。

毛沢東は、次のように述べている、「われわれの国家においては、労働者階級と民族ブルジョア階級の矛盾は人民内部の矛盾に属する。労働者階級と民族ブルジョア階級の階級闘争は、一般的には人民内部の階級闘争に属するが、それは、わが国の民族ブルジョア階級が二面性をもつてゐるからである。ブルジョア民主主義革命の時期にあつては、民族ブルジョア階級は革命性の一面をもつとともに、また妥協性の一面ももつてゐた。社会主义革命の時期にあつては、労働者階級を搾取して、党や国家の混乱をものともせず断乎たる態度

利潤を手に入れるという一面をもつとともに、また憲法を擁護し、よろこんで社会主義的改

造をうけいれる一面ももつてゐる。民族ブルジョア階級は、帝国主義・地主階級・官僚ブルジョア階級と異なる。労働者階級と民族ブルジョア階級とのあいだには、搾取と被搾取との矛盾が存在しているが、これはもともと敵対性的の矛盾である。しかし、わが国の具体的条件のもとでは、この二つの階級の敵対性の矛盾は、処理が妥当であれば、非敵対性的に転化でき、平和的な方法によってこの矛盾を解決できる。もしも、われわれの処理が妥当でなく、民族ブルジョア階級にたいして団結、批判、教育の政策をとらないか、あるいは民族ブルジョア階級がわれわれのこの政策をうけいれなければ、労働者階級と民族ブルジョア階級とのあいだの矛盾は、敵と我的あいだの矛盾に變るだろう」(『人民の矛盾を正しく処理する問題について』)。

このようない民族ブルジョアジーの美化は、「抗日民族統一戦線」時代からのものであるし、このような民族主義は又、農民＝小ブルジョアに依拠することから避けられないものである。

そして、この工業の発展、更にはそれが必要なとした原料生産をうながす「大躍進」(=人民公社化運動は、農民の階級分化など新たな矛盾を生みだし、毛沢東の路線をあやうくしたのであった。

一九五九年に国家主席となつた劉少奇は、生産力の発展によってこれを脱し、全面的な資本主義的発展をかちとることを志向したのであるが、それは、毛沢東の路線と真向から対立するものに他ならなかつたのである。

毛沢東はこれに對して、「資本主義の道を歩むもの」として批判し、「文化大革命」という公然たる闘争を開始したのである。その際のよりどころになつたのは、「継続革命」(=一九五九年に国家主席となつた劉少奇は、生産力の発展によってこれを脱し、全面的な資本主義的発展をかちとることを志向したのであるが、それは、毛沢東の路線と真向から対立するものに他ならなかつたのである)という思想であった。

毛沢東はすでに以前から「社会主義下の階級闘争」という主張を明らかにしていた。すなわち、「わが国では、社会主義的改造が所有の面では基本的にはなしとげられ、革命の時期における大規模の、あらしのような大衆的階級闘争は基本的に終わりをつけたが、しかし、くつかえられた地主・買弁階級の残存分子はまだ存在しており、ブルジョア階級をまだ存在しており、小ブルジョア階級はやつと改造されはじめたばかりである。階級闘争はまだ終わつてはいない」(同前)、と。

この「継続革命」の思想は、社会主義の規定はさておくとして、人民独裁を階級闘争の中ソ論争を見ると、少なくとも連共産党の「全人民国家」論に比して圧倒的優位性を示している。しかも毛沢東は、「文化大革命」を見られるように、修正主義との闘争において、党や国家の混乱をものともせず断乎たる態度

マルクス・レーニン主義通信

を貫徹したこと、これはトロツキーなどの日和見主義にくらべて、革命家としては偉大である。

だが、毛沢東の「継続革命」論は、「文化革命」での「斗私批修」というスローガンに示されるように、個人の思想を問題とし、思想改造を第一とするものである。それは、何故に階級闘争が存在するのか、しかも何故に「新たなブルジョア分子」が発生するのか、ということを唯物論的・科学的に明らかにしていらないという難点を有している。しかも階級闘争を、その一つの領域でしかない思想闘争に解消した場合、不斷に主觀主義的色あいを帯びざるをえないものである。「専」よりも「紅」という思想も、同様の傾向をはらんでいるのである。

△註▽いわゆる「四人組」は、これを純化し、「三大差別」（農業と工業、都市と農村、精神労働と肉体労働）まで思想革命で解消しうるかのように主張したのであった。

しかも、「社会主義下の階級闘争」論は、その規準となるべき社会主義が観念的である場合、主流派と反主流派の分派闘争的色彩を持ち、個人の思想を問題にすることから、個人の罪状をならべたてることで批判に堕してしまうのである。それは、ともすれば、指導部の自己保身の武器になる危険性を秘めているのである。

もちろん、農民が圧倒的多数を占める中国においては、文化・思想革命は絶対的意義を有するものである。だがそのこと、それを専らとすることによって社会主義が建設し得るかどうかということは別の問題である。中國の経験は、思想闘争・階級闘争による階級関係＝生産関係の変革もストレートには生産力の歴史的限界を克服することができないといふことを明らかにした。

農村経済であるが故に容易であった集団所有、国家所有と、それを社会主義と規定し、それに依拠して社会主義を建設しようとした毛沢東の「自立更生」「紅」の思想は、生産力の発展とともに現実にそぐわなくなってきた。毛沢東主義の個々の点が批判され始めてきたということはその証左である。今や、生産力の発展を第一とする合理的なイデオロギーが支配的になつてきたのである。

毛沢東の「実践論」の初めの方に、「真理の基準は社会的実践でしかありえない」というテーゼがでてくる。これは、結論から先に言えば、経験論への屈伏である（このテーマは

おわりに

はスターリン哲学でも用いられている）。レーニンは、「実践は認識の基準である」（『唯物論と経験批判論』）と述べているが、それは認識における実践の役割を言っているのであって、先のテーゼとは異なるものである。

更に毛沢東は、次のように述べている、「梨の味を知ろうと思えば……自分の口でたべてみなければならない」、「革命の理論と方法とを知ろうと思えば、革命に参加しなければならない。すべての眞の知識は、直接的経験にその源を発している」（同前）、と。

ここで問題点は、「梨の味」と「革命」とを同じようなものとして把えていたこと、従って、革命に参加すれば「革命の理論と方法」を知ることができるように、素朴に考えていること、などがまずあげられるが、のみならず、実践を個人的なそれとしてしか把握しておらず、それ故に、最後の一文は、不徹底な唯物論としての特徴を示していることである。

これに、「実践、認識、再実践、再認識、というこの形式が循環往復して、無限にくりかえされてゆき、循環ごとに実践と認識の内容がつねに高度のものになっていく」（同前）という主張がつけ加えられると、それは経験主義以外のものではなくなる。すなわち、ヘーゲル的に言えは、認識はどのようにして概念的段階に至るのかということが明らかにされず、認識過程が短絡させられ、結局のところ「やつてみなければわからない」式の不可知論的傾向を帯びてくるのである（後に引用した文は、第二次国共合作を合理化するために書かれた部分である）。レーニンが、概念は、個人の「直接的経験」などではなく、「全人類の集団的認識」によって獲得されたものであると言つているのを思いおこすのは、むだなことではないであろう。

毛沢東は、実践をこれまで見てきたように把握することから、理論と実践をあらかじめ切斷し、それを「実践の方が重要である」から、あるいは「実行しなければ……無意味であります」から統一しなければならないと主張している。だが、理論と実践を外的に比較するのは、頭と身体とどちらが大事かという問いと同じよう無意味であり、「統一しなければならない」というのは倫理的な意味しかもたないであろう。このような主張は、主觀主義やセクト主義を生みだすことになるのである。

これまで見てきたようなことから、毛沢東主義は後進国の革命的イデオロギーたりえたし、又、實際にも中国は民族解放闘争の「大後方」たりえてきた。更に、「スターリンのこの本は、はじめからおりまで上部構造を語らず、人間を考えていられない。モノを見て、人間をみない」（『スターリン』ソ同盟における社会主義の経済的諸問題への評注）と述べているようなところに、新左翼が容易に毛沢東主義に接近しうる理由があつたといえる。

毛沢東主義は、國際共産主義運動上においては、中ソ論争をエボックに、世界の革命的・國際主義的潮流の領袖として君臨してきた。特に、ソ連社会帝國主義を現實に批判する上では、多大な意義を有していたといえよう。

我々は、中国の社会経済の分析もなしに自らの「戦略」・観念的ドグマでもって裁断する弁証法の機械的運用をもたらす。毛沢東は、「矛盾論」で、「二つの軍隊が闘えば、一方が勝ち他方が負けるが、勝つも負けるも、内部の原因によるのである。一方が勝つのは、その軍が強いか、あるいはその指揮に誤りがあるからである」とか述べている。だが、軍隊の勝敗が、単なる「内部の原因」「指揮」だけによつて左右されるのであれば、革命は

單なる技術的問題になつてしまい、史的唯物論などは不用であろう。社会が有機的構成体である以上、その構成要素たる軍隊などに独立した「内部の原因」をみつけるのははなはだ問題を狭めることに他ならない。

毛沢東の弁証法理解がよく知れるものとして、次の文をあげておこう、「エンゲルスは三つの範疇をいっているが、わたしはそのうちの二つの範疇は信じない。（対立・統一が、もっとも基本の法則である。質・量の相互転化とは、質と量の対立、統一である。否定の否定などというものは、はじめからない。）質・量の相互転化、否定の否定を対立、統一と同列にならべるのは、三元論であつて、一元論ではない。云々」（『哲学問題にかんする講話』）。これでわかるように、毛沢東は弁証法をかなり機械的、力学的に考えているのである。

以上見てきたような、毛沢東の考え方からは、政治力学主義的な社会解釈、世界解釈が生みだされざるをえない。否、社会や世界を力学的にしか把えられなかつたことに、更に誤解を恐れずに言えは、農民＝小ブルジョアに重点をおく立場に、毛沢東の哲学は規定されていると言つた方が正確であろう。

一例をあげれば、中国共産党の「世界戦略」、外交は、一貫して、「侵略・干渉」している國とされている國の対立をシエーマとし、そこから國際政治、階級闘争にかかわるということに特徴があり、結果として革命の問題を国家間の戦争と平和の問題に従属させてきたのである。

今まで見てきたようなことから、毛沢東主義は後進国の革命的イデオロギーたりえたし、又、實際にも中国は民族解放闘争の「大後方」たりえてきた。更に、「スターリンのこの本は、はじめからおりまで上部構造を語らず、人間を考えていられない。モノを見て、人間をみない」（『スターリン』ソ同盟における社会主義の経済的諸問題への評注）と述べているようなところに、新左翼が容易に毛沢東主義に接近しうる理由があつたといえる。

毛沢東主義は、國際共産主義運動上においては、中ソ論争をエボックに、世界の革命的・國際主義的潮流の領袖として君臨してきた。特に、ソ連社会帝國主義を現實に批判する上では、多大な意義を有していたといえよう。

これまで見てきたような不徹底な唯物論は、あるからである」とか述べている。だが、軍隊の勝敗が、単なる「内部の原因」「指揮」であろうし、先進諸国においても、止めど

第二次ブント総括

連載第25回

どのようにして「第三期」を清算すべきか

目

次

はじめに

第一章 第一期(六一—六六年)関西ブントの思想形成

(一) 党内闘争

(二) 分派闘争—四分五裂へ

(三) 一二・一八路線から全国委員会へ

おわりに

- 第二章 ルカーチ、グラムシ批判
- 第三章 第二期(六六—六九年)関西ブントの実践過程(前号まで)
- 第四章 ブハーリン、ローザ批判—略—

第五章 第二期(六九年以降)——第一 次共産同の思想的、実践的分解

(一) 党内闘争

同盟の四分五裂をもたらした党内闘争が表面化した端初は、六八年、十・二一闘争の戦術をめぐる「火焰ピン論争」であったと言えるだろう。

それは次のような意味においてである。「火焰ピン論争」は、論争自体としては、防衛厅闘争において火焰ピンを使用するかどうかという戦術論争であった。その対立の両極を形成したのは、後に赤軍派につながる部分を主流としたフラクションと、叛旗・情況派である。だが、この論争は、単に戦術論争にとどまらず、より深い意義を有していた。すなわち、権力に逮捕された場合にそれまでのいわば学割的な拘留ではすまなくなつたある状況の中で戦術をエスカレートすることは、それまでの組織的団結の資では困難であるということ、このようなことを背景として「火焰ピン論争」のごとき論争は不可避なものだったのである。

△△後に赤軍派につながる部分を中心としたフラクションは、関西から上京したメンバーを中心としていた。そして、関西からの人員配置による千葉、神奈

た。すなわち、前のフラクとは比べものにならないほど強固な結集軸をもち、厳選されたメンバーによって、形成されたということである。

四・二八闘争での破防法適用により、逮捕状の出ているとされた六名—仏、松本、久保井、一向、田宮、三上の地下潜行は、同盟の統一大性の破壊の中で無指導状態を生みだし、各人がフラクの中心人物であったことから同盟のフラク系葉県委員会がリプリントして発行したというような事実からもその一端がうかがい知れるのである。

又、叛旗派は、旧中大独立ブントを中心に形成された。六八年から発行された『叛旗』は、三多摩地区委員会の機關誌である。そこでは吉本隆明、平田清明などのイデオロギーをとりこんだ革命論が展開されていた。創刊号によれば、そのガイストは次のようなものである。すなわち、「階級形成の軸をへ関係の革命×へ『生活思想』(の定着)と『所有』(個的)共同体所有)の問題として提出する」という共産主義論、階級形成論と、国家を「共同幻想」として把握する視点からの幻想あるいは疎外からの解放を唱える「自立」社会的階級へ」という国家論、戦術的には成田、砂川、学園などの「拠点」での闘争は「て」というフラク内文書をもって党内党の方針を確定したのである。

一方、吉本隆明、平田清明などのイデオロギーをとりこんだ革命論が展開されていた。創刊号によれば、そのガイストは次のようなものである。すなわち、「階級形成の軸をへ関係の革命×へ『生活思想』(の定着)と『所有』(個的)共同体所有)の問題として提出する」という共産主義論、階級形成論と、国家を「共同幻想」として把握する視点からの幻想あるいは疎外からの解放を唱える「自立」社会的階級へ」という国家論、戦術的には成田、砂川、学園などの「拠点」での闘争は「て」というフラク内文書をもって党内党の方針を確定したのである。

△△後に赤軍派につながる部分を中心としたフラクションは、関西から上京したメンバーを中心としていた。そして、関西からの人員配置による千葉、神奈

た。すなわち、前のフラクとは比べものにならないほど強固な結集軸をもち、厳選されたメンバーによって、形成されたということである。

四・二八闘争での破防法適用により、逮捕状の出ているとされた六名—仏、松本、久保井、一向、田宮、三上の地下潜行は、同盟の統一大性の破壊の中で無指導状態を生みだし、各人がフラクの中心人物であったことから同盟のフラク系葉県委員会がリプリントして発行したというような事実からもその一端がうかがい知れるのである。

又、叛旗派は、旧中大独立ブントを中心に形成された。六八年から発行された『叛旗』は、三多摩地区委員会の機關誌である。そこでは吉本隆明、平田清明などのイデオロギーをとりこんだ革命論が展開されていた。創刊号によれば、そのガイストは次のようなものである。すなわち、「階級形成の軸をへ関係の革命×へ『生活思想』(の定着)と『所有』(個的)共同体所有)の問題として提出する」という共産主義論、階級形成論と、国家を「共同幻想」として把握する視点からの幻想あるいは疎外からの解放を唱える「自立」社会的階級へ」という国家論、戦術的には成田、砂川、学園などの「拠点」での闘争は「て」というフラク内文書をもって党内党の方針を確定したのである。

△△後に赤軍派につながる部

分を中心としたフラクションは、

関西から上京したメンバーを中心としていた。そして、関西からの人員配置による千葉、神奈